

20122409/A

厚生労働科学研究費補助金

障害者対策総合研究事業

成人期以降の発達障害者の相談支援・居住空間・余暇に関する
現状把握と生活適応に関する支援についての研究

平成24年度 総括研究報告書

研究代表者 辻井正次

平成24(2012)年 5月

目 次

I. 総括研究報告

成人期以降の発達障害者の相談支援・居住空間・余暇に関する現状把握
と生活適応に関する支援についての研究

辻井正次 ----- 1

II. 分担研究報告

1. 成人期以降の発達障害者の日常生活における支援ニーズおよび精神的
健康状況に関する実態把握

辻井正次・萩原拓・鈴木勝昭 ----- 15

2. 成人期の発達障害者に対する地域生活支援の実践における成果と課題

肥後祥治・岸川朋子 ----- 55

3. 名古屋市での一人暮らしに対する支援ニーズ把握のための取り組み

辻井正次 ----- 65

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 ----- 79

IV. 研究成果の刊行物・別刷 ----- 87

I . 総括研究報告

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）

総括研究報告書

成人期以降の発達障害者の相談支援・居住空間・余暇に関する現状把握と
生活適応に関する支援についての研究

研究代表者 辻井正次（中京大学現代社会学部）

研究要旨

成人期の発達障害者，特に成人期以降に診断を受けた発達障害者の地域生活支援は十分ではない。本研究では，すでに成人期以降の発達障害者の生活支援や就労支援の取り組みを模索している横浜市と滋賀県，それに名古屋のNPO 法人アスペ・エルデの会の3箇所での実際の取り組みの評価をしつつ，発達障害のある成人の地域生活支援における支援ニーズや医療的ニーズの実態把握のための調査を行った。実態把握調査の結果，成人期の発達障害者の中には，一人暮らしを希望する人が半数近くいるが，その発達特性によって地域で生活していくためにはサポートを必要としていることが明らかとなった。また，精神疾患の合併が疑われる場合も少なくなく，医療的ケアも含めたサポート体制の構築が求められることが明らかとなった。さらに，横浜市，滋賀県における，成人期発達障害者の一人暮らし支援の取り組みを評価したところ，発達障害者の地域生活支援における共通点として，記録の活用・スキル提供・スケジュール提示などの取り組みやすい支援と，マニュアル化しにくい支援，本人に困り感があまりないものの支援などが取り組みとして定着しにくいことが明らかとなった。名古屋のNPO 法人アスペ・エルデの会の取り組みからは，成人期の発達障害者は，日常生活における具体的なスキルはあるものの，見通しを立てて計画的に生活することへのサポートの必要性が明らかとなった。実態調査および実践活動の分析から，今後の地域生活支援において考慮すべき支援ニーズが明らかとなった。

分担研究者 肥後祥治（鹿児島大学教育学部）
岸川朋子（特定非営利活動法人 PDD サポートセンターグリーンフォーレスト）
鈴木勝昭（浜松医科大学子どもこころの発達研究センター）
萩原拓（北海道教育大学旭川校）

研究協力者	野田航	(浜松医科大学子どもこころの発達研究センター)
	松田裕次郎	(社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団クリエートプラザ東近江ジョブカレ)
	浮貝明典	(特定非営利活動法人 PDD サポートセンターグリーンフォレスト)
	國井一宏	(特定非営利活動法人 PDD サポートセンターグリーンフォレスト)
	田中尚樹	(特定非営利活動法人アスペ・エルデの会)
	松本かおり	(浜松医科大学子どもこころの発達研究センター)

A. 研究目的

成人期の発達障害者、特に、成人期になってから診断を受けた発達障害者の地域生活支援は十分ではない。発達障害者と向き合う福祉現場にあつては、高度な支援技術や専門的知識を有した人員体制の確保が必要となるのだが、その受け皿整備がほとんど進んでいないのが現状である。自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）の成人は、社会性の障害から他者との共同生活は難しいことが少なくない。感覚過敏性の問題や興味やこだわりなどから、自分自身の居住空間を求める人が多い。しかし、社会性障害による一般常識の不足に加えて、こだわりや不安、不器用などで、独り暮らしにおける困

難は大きい。余暇支援は、地域の中で誰とつながって暮らしていくのかを考える上で重要な視点だが、十分な実態把握も行われていない。どこで、どういうサポートを受け、誰とつながりながら地域生活をしていくのかという点に関して、十分に当事者たちのニーズを把握し、そうした実態把握に基づいて、実際の支援のあり方を提案し、障害者福祉サービス体系で（精神疾患合併などへの）予防的な支援のありようを明確にしていくことが本研究の目的である。すでに成人期以降の発達障害者の生活支援や就労支援の取り組みを模索している横浜市と滋賀県、それに名古屋のNPO法人アスペ・エルデの会の3箇所での実際の取り組みの

評価をしつつ、実際的な障害者福祉サービスメニューの提案を目指す。成人期の発達障害者の支援ニーズを適切に把握し、適切な支援サービスに結びつけることができれば、適切な生活力が身につき就労にも結びつき易くなることで、生活保護が減り納税者となることが期待される。一方、安定就労している人たちにとっても余暇支援などを通じた支援により、予防的な効果が期待できる。さらに、相談支援や生活支援での独り暮らしへの準備教育を受けることで、親亡き後等にも引きこもりや路頭に迷うことなく、地域移行して暮らしていける発達障害者が増えることが期待できる。こうした支援モデルは、ノーマライゼーションを推進していくだけではなく、納税者を維持していく意味でも効果を期待され、新しい支援のモデルを構築していくことにつながると考える。

3年計画の1年目である平成24年度は、発達障害のある成人を対象とした生活支援におけるニーズ調査や医

療的ニーズの実態調査と、各地域で既に実践されている発達障害者の地域生活支援の取り組みの分析を行い、次年度以降の効果的な支援サービス構築のための基礎的な情報を収集することが目的であった。

B&C 研究方法および研究結果

1. 成人期以降の発達障害者の日常生活における支援ニーズおよび精神的健康状況に関する実態把握(辻井正次・萩原拓・鈴木勝昭)

本研究では、成人期（18歳以降）の発達障害者を対象として、どのような日常生活を送っているのかの実態把握（余暇を含む）、どのような生活を送りたいと考えているかについての希望やニーズの把握、抑うつや不安などの精神的健康状態に関する実態把握を目的とした調査を実施した。

調査の結果、成人期の発達障害者には、一人暮らしを望む人たちが半数近くいるが、彼らは一人暮らしに対する心配を持っており、サポートが欲しい

と考えていることが明らかとなった。

さらに、就職状況については半数以上が就職していないということが分かった。就職している場合でも、その平均収入が約 85,000 円であり、一人暮らし等の生活を維持していくには収入が少ない実態が明らかとなった。福祉制度の利用に関しては、ほとんどの人が手帳を取得しており、約半数が障害年金を受給していたが、一方で、障害者自立支援法つなぎ法などの制度については「知らない」という人が少なくなく、既にある制度も利用できていないケースがあることが明らかとなった。

精神的健康状況に関する項目の検討から、成人期の発達障害者の中には、精神疾患を合併している可能性がある人が多いことが明らかとなった。成人期の発達障害と精神疾患の合併は、その予後を悪化させる可能性が考えられ、精神医学的なサービスの充実が求められる。

以上の結果より、一人暮らしを希望

する発達障害者への支援ニーズや精神医学的なサポートを受けられる制度の必要性が示唆された。成人期の発達障害者のための、一人暮らし支援を含む地域生活支援を充実させるために必要な支援ニーズや現状が明らかとなり、今後の支援施策への示唆が得られた。

2. 成人期の発達障害者に対する地域生活支援の実践における成果と課題（肥後祥治・岸川朋子）

本研究では、将来的に全国で実施できるような成人期の発達障害者の支援モデルを構築するために、滋賀県と横浜市で実施している成人期の発達障害者に対する地域生活支援の取り組みを通して、その実践内容と成果および課題を分析した。

滋賀県（発達障害者自立生活支援システム構築事業：以下ジョブカレ）と横浜市（発達障害者サポートホーム運営事業：以下サポートホーム）では、成人期の発達障害者に対する地域生

活支援として、発達障害者の一人暮らしを支援する取り組みを実施している。滋賀県と横浜市の取り組みは、発達障害者の地域生活支援は十分でないと言われている中で、発達障害者に暮らしの場を提供し、ひとり暮らしを見越したアセスメントや支援を行っているという点について類似しており、今回、共同で研究を行っていく中で、両者の支援内容を出し合い、発達障害者の地域生活支援の共通点を探っていく。その結果、記録の活用・スキル提供・スケジュール提示などは比較的取り組みやすい支援であるが、マニュアル化しにくい支援や本人に困り感があまりないものの支援は取り組みとして定着しにくいことが明らかとなった。

また、「人とのかかわり」の支援は、特に支援の難しさが際立っており、発達障害者のコミュニケーション部分の難しさがあらわれていた。いかに支援者が困ったときに頼りになる存在になれるかによって、入居者のニーズ

の発信の度合いも変わってくるし、支援者のニーズを受け止められる幅も変わってくる。支援者に求められるものをまとめていく作業も、今後の課題として明らかとなった。

3. 名古屋市での一人暮らしに対する支援ニーズ把握のための取り組み（辻井正次）

本研究では、将来的に全国で実施できるような成人期の発達障害者の支援モデルを構築するために、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会における地域生活支援の取り組み（ライブプランニングのプログラム、一人暮らし支援）を通して、その実践内容と成果および課題を分析した。

NPO 法人アスペ・エルデの会では、一人暮らしや親のサポートを受けなくても生活できるような居住についてのサポートを考え、ライフプランニングというプログラムを設けている。このプログラムでは、一人暮らしをする上で必要なスキル、情報、費用など

についての勉強会と実習を行っている。このプログラムの実践から、発達障害のある成人は、生活に必要な一つひとつのスキルは身に付いていても、計画を立てて見通しを持って行動すること（毎日メニューを考える、数日分の買い物をする等）に困難さを感じていることが明らかとなった。

また、アスペ・エルデの会に所属する4名を対象として、一人暮らしを体験する上でどのようなサポートを行えばよいかを検討した。その結果、生活を行う上で必要なことを知識として知らないということを確認していくことの必要性や、一人暮らしをしても困った時には相談できる人を確保することの重要性、現行の支援サービスにはないようなタイムリーな訪問支援、生活スキルに関する学習の機会が、発達障害者にとっても利用しやすい支援になることが示唆された。

D&E 全体の考察と結論

成人期の発達障害者の地域生活支

援は十分ではない。本研究では、すでに成人期以降の発達障害者の生活支援や就労支援の取り組みを模索している横浜市と滋賀県、それに名古屋のNPO 法人アスペ・エルデの会の3カ所での実際の実践の取り組みの評価を一つ、成人期の発達障害者の地域生活支援における支援ニーズや医療的ニーズを調査した。

実態把握調査から、成人期の発達障害者の中には一人暮らしを希望する人が半数近くいるが、その発達特性によって地域で生活していくためにはサポートを必要としていること、精神疾患の合併が疑われる場合も少ないことが明らかとなり、医療的ケアも含めた生活のサポート体制の構築の必要性が明らかとなった。また、各地域での一人暮らし支援の取り組みを評価した結果、支援ニーズや課題などの共通点が明らかとなった。平成24年度の取り組みから、一人暮らし支援を行う上で、どのような点で支援が必要なのか、どのような部分はサポート

の仕方次第で自ら適応することができるようになり、どのような部分が継続したサポート体制が必要なのかということへの示唆が得られた。これらの成果に基づき、制度としてどのようなことへどのような形でサポートを提供していくのかということをもとめ、現状ある福祉サービスのメニューに、新しい具体的かつ効果的なメニューを構築していくことの必要性が明らかとなった。

次年度以降は、今年度に開始した成人期以降の発達障害者本人への実態調査を継続するとともに、彼らの両親に対する家族自体のサポートニーズへの実態調査を行う。家族全体としてのサポート体制、当事者団体などの活用状況と、地域の中でのサポート・ネットワークのあり様についても検討する。2年間の実態調査の結果と、横浜、滋賀、名古屋の各地域での実践的な取り組みの効果検討を行い、知的障害のない発達障害の成人期以降の支援の基本的なモデルを提案していく。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

安達潤・斎藤真善・萩原拓・神尾陽子
(2012). アイトラッカーを用いた高機能広汎性発達障害者における会話の同調傾向の知覚に関する実験的検討. 児童青年精神医学とその近接領域, 53(5), 561-576.

Anitha, A., Nakamura, K.,
Thanseem, I., Matsuzaki, H.,
Miyachi, T., Tsujii, M., Iwata,
Y., Suzuki, K., Sugiyama, T., &
Mori, N. (2012).

Downregulation of the
expression of mitochondrial
electron transport complex
genes in autism brains. *Brain
Pathology*, 23(3), 294-302.

Anitha, A., Nakamura, K.,
Thanseem, I., Yamada, K.,
Iwayama, Y., Toyota, T.,

- Matsuzaki, H., Miyachi, T., Yamada, S., Tsujii, M., Tsuchiya, K., Matsumoto, K., Iwata, Y., Suzuki, K., Ichikawa, H., Sugiyama, T., Yoshikawa, T., & Mori, N. (2012). Brain region-specific altered expression and association of mitochondria-related genes in autism. *Molecular Autism*, 3(1): 12.
- Anitha, A., Thanseem, I., Nakamura, K., Yamada, K., Iwayama, Y., Toyota, T., Iwata, Y., Suzuki, K., Sugiyama, T., Tsujii, M., Yoshikawa, T., & Mori, N. (2012). Protocadherin α (PCDHA) as a novel susceptibility gene for autism. *Journal of Psychiatry & Neuroscience*, 37(6):120058.
- 萩原拓 (監修)(2012). 自閉症スペクトラムの青少年のソーシャルスキル実践プログラム. ジャネット・マカフィー著. 明石書店.
- 萩原拓 (2012). 第3章-3: ABA 発達障害: 早めの気づきとその対応. 市川宏伸・内山登紀夫 (編著). 中外医学社.
- 伊熊正光・鈴木勝昭・土屋賢治・中村和彦・辻井正次・森則夫 (2012). 高機能自閉症スペクトラム障害者における脳内コリン系の異常. *子どものこころと脳の発達*, 3(1), 17-22.
- 伊藤大幸・野田航 (2012). ASD の認知・神経心理学 (分担執筆). 日本発達障害ネットワーク (JDD ネット) (編) 発達障害年鑑: 日本発達障害ネットワーク (JDD ネット) 年報 Vol. 4. (pp. 44-48). 東京: 明石書店.
- Ito, H., Tani, I., Yukihiro, R., Adachi, J., Hara, K., Ogasawara, M., Inoue, M., Kamio, Y., Nakamura, K., Uchiyama, T., Ichikawa, H., Sugiyama, T., Hagiwara, T., Tsujii, M. (2012).

- Validation of an interview-based rating scale developed in Japan for pervasive developmental disorders. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 6(4), 1265-1272
- Kawakami, C., Ohnishi, M., Sugiyama, T., Someki, F., Nakamura, K., Tsujii, M. (2012). The risk factors for criminal behavior in high-functioning autism spectrum disorders (HFASDs): A comparison of childhood adversities between individuals with HFASDs who exhibit criminal behavior and those with HFASD and no criminal histories. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 6(2), 949-957.
- 中島俊思・伊藤大幸・大西将史・高柳伸哉・大嶽さと子・染木史緒・望月直人・野田航・林陽子・瀬野由衣・辻井正次 (2012). 3歳児健診における広汎性発達障害児早期発見のスクリーニングツール PARS 短縮版導入の試み. *精神医学*, 54, 911-914.
- 中島俊思・野田航・辻井正次 (2013). 乳幼児健診における発達障害の客観的スクリーニング方法導入の意義と可能性. *月刊地域保健*, 44, 49-61.
- 中島俊思・岡田涼・松岡弥玲・谷伊織・大西将史・辻井正次 (2012). 発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴. *発達心理学研究*, 23(3), 264-275.
- 野田航 (2012). 発達障害者支援における認知行動療法: 障害特性の理解と支援の基本スタンス. 「知的障害・発達障害のある人への支援」愛知県知的障害者福祉協会研究紀要, 17, 36-38.
- 野田航 (2012). 性差に関連した海外の文献レビュー〔特集: 発達障害とジェンダー/男の生き方・女の生

- き方と自閉症スペクトラムであること〕. アスペハート, 30, 16-21.
- 瀬野由衣・岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・望月直人・辻井正次 (2012). DCDQ 日本語版と保護者の養育スタイルとの関連. 小児の精神と神経, 52(2), 149-156.
- 鈴木勝昭・杉山登志郎 (2012). 【発達神経心理学のトピックス】自閉症スペクトラムと脳. Brain Medical, 24(4), 309-316.
- Suzuki, K., Sugihara, G., Ouchi, Y., Nakamura, K., Futatsubashi, M., Takebayashi, K., Yoshihara, Y., Omata, K., Matsumoto, K., Tsuchiya, K., Iwata, Y., Tsujii, M., Sugiyama, T., & Mori, N. (2013). Microglial activation in young adults with autism spectrum disorder. JAMA Psychiatry, 70(1), 49-58.
- 田中善大・野田航 (2012). 自閉症, アスペルガー症候群のある人のこだわり行動との楽しいつきあい方 [特集 : こだわりの上手な対処法] . アスペハート, 31, 64-71.
- Tsuchiya, K., Matsumoto, K., Yagi, A., Inada, N., Kuroda, M., Inokuchi, E., Koyama, T., Kamio, Y., Tsujii, M., Sakai, S., Mohri, I., Taniike, M., Iwanaga, R., Ogasahara, K., Miyachi, T., Nakajima, S., Tani, I., Ohnishi, M., Inoue, M., Nomura, K., Hagiwara, T., Uchiyama, T., Ichikawa, H., Kobayashi, S., Miyamoto, K., Nakamura, K., Suzuki, K., Mori, N., Takei, N. (2013). Reliability and Validity of Autism Diagnostic Interview-Revised, Japanese Version. Journal of Autism and Developmental Disorders 43(3), 643-662.
- 内田裕之・辻井正次 (2012). 自閉症スペクトラムの困ったこだわり行動への対応法. アスペハート,

- 11(1), 50-53.
- 内田裕之・辻井正次 (2012). 発達障害とともに成人期を生きるということ: ADHD と ASD を例に. 教育と医学, 60(6), 480-486.
- 内山敏・大西将史・中村和彦・竹林淳和・二宮貴至・鈴木勝昭・辻井正次・森則夫 (2012). 日本における成人期 ADHD の疫学調査: Adult ADHD self report scale-screener (ASRS-screener) 陽性群の特徴について. 子どものこころと脳の発達, 3(1), 23-33.
- 内山敏・大西将史・中村和彦・竹林淳和・二宮貴至・鈴木勝昭・辻井正次, 森則夫 (2012). 日本における成人期 ADHD の疫学調査: 成人期 ADHD の有病率について. 子どものこころと脳の発達, 3(1), 34-42.
- 和久田学・櫻井典啓・土屋賢治・鈴木勝昭 (2012). 行動上の問題に関わる危険因子を抱えた子どもに働く防御因子の探索: 科学的根拠に基づいた支援のために. 子どものこころと脳の発達, 3(1), 43-51.
- 肥後祥治 (2012). 自閉症児(者)のより良い自己決定, 自己選択のために. 特別支援教育研究, 6, 13-15.
- 肥後祥治・熊川理沙 (2013). 特別支援教育導入期の高等学校における特別支援教育の進展に関する研究: P 県における追跡調査より. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会学編, 64, 95-106.
- 肥後祥治・福田沙耶花 (2013). 自閉症幼児のコミュニケーション指導における情報伝達行動の形成の試み: 報告言語行動・「なぞなぞ遊ぶ」をとおして. 自閉症スペクトラム研究実践報告集, 10, 35-46.
- 岸川朋子 (2012). 発達障害の人たちのひとり暮らしを地域で支援するために: 横浜市のサポートホーム事業からの一考察. アスペクト, 31, 76-81.
- 松田裕次郎 (2012). 発達障害の人た

ちのひとり暮らしを地域で支援するために：地域生活移行に向けた滋賀での取り組み. アスペハート, 32, 68-76.

田中尚樹 (2012). アスペ・エルデの会におけるここ数年の成人たちの就労状況と課題について. アスペハート, 32, 58-63.

田中尚樹 (2012). どこでも活用できる支援を：発達障害の子どもやその家族のために. チャイルドヘルス, 15 (9), 678-689.

田中尚樹 (2012). 発達障害者の就労支援：支援団体の取り組み. 障害者と雇用働く広場, 422, 26-27.

2. 学会発表

Noda, W., Hagiwara, T., Mochizuki, N., Iwasaki, M., & Tsujii, M. (2012). *Effect of a short-term treatment program for anxiety in children diagnosed with autism spectrum disorders.* Poster presented at the

International Meeting for Autism Research 2012, Toronto, Canada.

鈴木勝昭 (2012). 自閉症スペクトラム障害の脳病態の神経生化学的側面：PET 研究. 第 35 回日本神経科学大会 (名古屋). 口演・シンポジウム.

Suzuki, K., Mori, N. (2012). *Positron Emission Tomography in Autism Spectrum Disorders. The 11th Biennial Meeting of the Asian Pacific Society for Neurochemistry* (Kobe, Japan). 口演・シンポジウム

Tsujii, M., Ito, H., Ohtake, N., Takayanagi, N., & Noda, W. (2012). *Validation of a Japanese version of the Vineland Adaptive Behavior Scales, Second Edition: Clinical utility for assessment of autism spectrum disorders.* Poster presented at the International Meeting for

Autism Research 2012, Toronto,
Canada.

福元康弘・四ツ永信也・内倉広大・小
久保弘幸・新條嘉一・佐藤誠・肥
後祥治・雲井未歆・片岡美華
(2012). 日々の授業を対象にした
授業研究会の在り方と効果の検
討: 授業研究を基軸とした豊かな
学びをはぐくむ授業づくり. 日本
特殊教育学会第 50 回大会発表論
文集.

藤原直子・原口英之・高橋咲子・元谷
陽子・竹ノ内千智・肥後祥治・有
川宏幸 (2012). 「ペアレント・ト
レーニング」を地域での実践に広
げるために (2): 地域におけるペ
アレント・トレーニング. 日本特
殊教育学会第 50 回大会発表論文
集.

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし

II. 分担研究報告

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）

分担研究報告書

成人期以降の発達障害者の日常生活における支援ニーズおよび
精神的健康状況に関する実態把握

研究代表者

辻井正次（中京大学現代社会学部）

分担研究者

萩原拓（北海道教育大学旭川校）

鈴木勝昭（浜松医科大学子ども心の発達研究センター）

研究協力者

野田航（浜松医科大学子ども心の発達研究センター）

松本かおり（浜松医科大学子ども心の発達研究センター）

研究要旨

本研究では、成人期以降の発達障害者の相談支援・居住空間・余暇に関する現状把握と精神医療ケアの現状とニーズ把握を目的とした実態調査を実施した。調査の結果より、発達障害のある成人の半数近くが一人暮らしを希望しているが、一人暮らしに対する心配も多くサポートを求めていること、具体的な支援法や制度が不足している実態が明らかとなった。また、発達障害のある成人の中には、気分障害や不安障害等の精神疾患が合併している可能性のある人が少なくないことが明らかになった。以上より、今後の地域生活適応を支援していく上で考慮すべき点が明確になった。

A. 研究目的

発達障害者支援法の施行後、発達障害児者の支援は徐々に充実してきている。しかし、成人期の発達障害者、特に、成人期になってから診断を受けた発達障害者の地域生活支援は十分ではない。今までの支援施策、なかでも就

労支援施策は一定の成果をあげること

ができ、安定就労できる人たちが増えてきている。しかし、一方で、中年期まで安定して就労してきた人が、老後に向けてのビジョンを考えた場合、年老いた両親の亡きあとの、生活支援における大きな課題を残している¹。一定

期間安定就労できている場合、相談支援などのサポート資源との関係が途切れやすく、精神疾患合併などで状態が悪くなってからしか対応されないことも多い。特に知的障害のない自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorders ; 以下、ASD）の場合、家族や周囲だけでなく本人にも障害の認識がなく、福祉的支援を受けることなく成人期を迎えていることも少なくない。こうした中には、日常生活に必要な基本的なスキルが不十分で、就職後に職場でのトラブルや転職を繰り返す等により、精神疾患を合併し、場合によってはひきこもりや犯罪行為に至ってしまうケースもある²。ASD 成人は、社会性の障害から他者との共同生活は難しいことが少なくない。また、感覚過敏性の問題や興味やこだわりなどから、自分自身の居住空間を求める人も多いが、社会性の障害による一般常識の不足に加えて、こだわりや不安、不器用などで、独り暮らしにおける困難は大

きい。さらに、充実した日常生活を送るうえで必要な余暇は、地域の中で誰とつながって暮らしていくのかを考える上で重要な視点だが、十分な実態把握も行われていない。

本研究では、成人期（18歳以降）の発達障害者を対象として、どのような日常生活を送っているのかの実態把握（余暇を含む）、どのような生活を送りたいと考えているかについての希望やニーズの把握、抑うつや不安などの精神的健康状態に関する実態把握を目的とした調査を実施した。

B. 研究方法

1. 調査対象者

発達障害者の支援を行っているNPO団体や大学、支援センター等を通じて、発達障害のある成人を対象として調査用紙を配布し、回答させた。回収した調査用紙の中から、発達障害の診断を受けており、18歳以上である者のデータ（ $N=64$ ）のみ分析に用いた。回答者

の性別の内訳は、男性 46 名、女性 18 名であり、平均年齢は 29.7 歳（範囲：18-52）であった。

2. 調査項目

調査項目の一覧を資料に示す。調査項目には、希望する生活形態および現在の生活形態に関する項目、医療上の状況に関する項目が含まれていた。また、精神疾患のスクリーニングのために、K10³の日本語版⁴および、PRIME-J スクリーニング⁵を用いた。

3. 分析方法

発達障害のある成人の実態を把握するため、各調査項目の平均値や分布、内訳等の記述統計を算出した。

C. 研究結果

1. 希望する生活形態

各調査項目に対する結果を図 1～8、表 1～6 に示す。今の生活形態については、家族と同居している人が 67.2%、

一人暮らしが 25%、施設入所が 7.8%であり、半数以上が家族と同居していた。現在の生活形態を続けることに対する希望は、続けたいと思う人が 71.9%、思わない人が 28.1%であり、多くの人には変化することなく現在の生活形態を継続したいと考えていた。また、両親が亡くなった後にどこで生活したいかという質問については、一人暮らしが 43.8%と最も多く、次いで自宅 32.8%、その他 12.5%、グループホームが 9.4%であった。両親が亡くなった後に誰と生活したいかという質問では、ひとりが 35.9%と最も多く、次いで恋人 14.1%、友人 12.5%と続いていた。

将来、どのような仕事をしたいかという質問については、現在就職している人（常勤雇用と非常勤雇用）の中で今の仕事を続けたい人は 60.7%、他の仕事をしたい人が 39.3%であった。生活するためにどれぐらいの収入（月収）がほしいかについては、年収と勘違いして回答したと考えられるデータ（月